

存在することの意味の探求
－ ハイデガー『存在と時間』をめぐって －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
渋谷 光央

本論文は、人が存在することの意味をハイデガー『存在と時間』から読み解くことにより、人間本来の姿勢、生き方を探求することを目的としている。

現在の日本社会では高齢社会が問題となっている。高齢者が激増していくなかで、介護を仕事とする者が圧倒的に少ない状態である。では、なぜ介護の仕事をする者が少ないのか。看護師と同様、劣悪な環境の中での就労を余儀なくされていると言われている。勤務時間は不規則であり、排泄、排尿のケアをすることもあり、しかも人相手の仕事なので、時には人間関係のトラブルにも巻き込まれることもある。その割には、待遇面は介護報酬が少ないこともあり低賃金の場合がほとんどである。そんな状況もあり、今の日本の人々はどうしても楽しい仕事、楽な仕事を探さようになってきている。それはハイデガー『存在と時間』でいう『非本来的な生き方』である。仕事はほどほどに、趣味に時間を費やすために生きていることを否定するわけではない。人を相手にする仕事（ヒューマンサービス）は、ストレスを多く感じる仕事ではある。介護や看護以外にも、外食産業も就業する者が減っていると言われている。ストレスを感じる人が多いからと言ってすべての人々が楽で楽しい仕事を選べば日常生活が成り立たなくなる。今看護師がいなくなれば、医師が看護師の代わりにケアができるのか、医師の業務量を考えると困難である。必要とする人がいるから楽でない、楽しくない仕事もあるのではないか。それこそハイデガーが言う現存在として「本来的な生き方」ではないか。

しかし、我々自身「存在」の意味をきちんと理解しているのか、世界内存在という存在をどう理解しているのか、これこそハイデガー思想の基本となるのである。ハイデガーは、非本来的な現存在として、世人が頹落した存在であることをあらためて考えることにより、現存在の在り方を考察している。

人が生活するにあたって何事も安易に考えるのではなく、終わりまで考え抜くこと、考え抜くことにより、自分がどんな生き方をすべきか、「終わり」を意識しながら、日々を過ごすことの大切さを感じるきっかけがハイデガー『存在と時間』である。しかし、哲学のつつきにくさは自ら経験したのでよく理解できる。

哲学に触れることが過去の偉人や、その時代に考え抜かれた思想を感じ、今後にかすことができるのである。では、哲学に触れるにはどうしたらいいか。本研究は、筆者自ら哲学に触れてみることにより、どうしたら現代社会で哲学に触れやすくなるのか、また哲学をさまざまな場面で基本思想として持つことにより、『非本来的な生き方』から『本来的な生き方』を意識した生活を過ごすことができるきっかけとなることを最終的に目指すものである。